

TOKYO美人と、東京1000ストーリー

婚約者は刑事

⑤

5回連載・完了(008) 数奇屋橋

穂高健一

画廊だった。

「警察官がすべて善人だ、とは決まってる。この世には悪い警官もいる」

「溝口さんにかぎって、ゼツタイ猫事件の犯人じゃありません」

「事件の捜査に、絶対はない。お腹が空いたな。安いところでラーメン、張り込んで寿司でもいい」

「消化不良の話はしないでください」

「消化が気になるなら、ジアスターゼの多い大根、お袋の味の煮物などでもいい。環八まで出れば、トラックが多いから、定食屋があるかもしれない」

「わたし、怒っているんです。溝口さんを犯人扱いにするなんて」

彼女が唇を尖らせた。

「人間は空腹だと、苛立つ。苛立てば、冷静さを失い、物事が感情的になる。真実を見失う。外観や職業で、物事を判断してしまふものだ」

井伊の視線が、すれちがうベビーカーにむけられた。赤子は人形のようにかわいい。井伊の視線がごく自然に追った。かるく手をふるると、赤子が笑った。

「溝口刑事を容疑者と決めつけた、その根拠を聞かせてください」

この人物はこの犯行とは関わりない。そう思われる人間から疑

つてみる。これが捜査のセオリーのひとつ。井伊佳元は肩をならべる布施和香奈に、溝口刑事も対象外ではないといった。

「かれは本庁捜査一課の刑事ですよ」

和香奈の目がつよく否定していた。

ふたりはフラワーランドからの帰り道、春早い砧公園きぬたに入った。向かう先は田園都市線の用賀駅ようが。そして、事件現場の銀座の



「食後まで、待てない？」

「待てません」

「猫事件の犯人は、TAKANO画廊の機械警備の知識、もしくは盲点を知っている。深夜に画廊に入れる、それなりの手段を持つ。溝口刑事は捜査の基本知識として、警備の盲点を知りえる職業だ」

「いい加減さんだつて、スーパーの店長だし、警備の盲点を知っているんでしょ」

「まあ、な。過去に起きた犯罪からも、経験的に知っている」

赤外線センサーは動くものに敏感に反応する。静止したものは無反応。事前に、なにかの物体で、レーザー自体を塞いでおけば、センサーは盲目になる。外国人犯罪者がスーパーでつかう、巧妙な手口のひとつだと、井伊はおしえた。

「でしょう。警備の盲点を知るから、猫事件の犯人だとはいえません」

「この事件はきつと内部犯だ。背景には鷹野家のもめごとが臭う。溝口刑事はあなたと結婚すれば、内部の人間になる。ドタキャンがなければ、もはや鷹野家の親族だった」

「その推理にはかなりムリがあります。『水瓶と猫』と『水瓶と落葉』をすり替えれば、関係者にはすぐ贖物だとわかります。

刑事がそんな間の抜けた犯罪をするかしら？ 罪を犯せば、彼は警察人生を棒にふるんですよ」

「そうムキになって弁明しなくてもいい。溝口刑事の動機は

めいりょう
明瞭だ。順序だてて話すと、彼は心底から、布施和香奈と結婚したくなかった。それが犯行に走らせた」

「ひどい推理。日比谷公園で、『財産狙いの結婚が目的なんですよ』といつて、わたしが溝口さんを怒らせたことは事実です。そのまえに、受賞作から猫が消えていました。後と先が逆で、時間的にも矛盾しています」

一本取った、といわないばかりに、和香奈の目が光った。

「結婚式のドタキャンは、二度ともあなたには落ち度がない。ここがキー・ポイントだ。溝口刑事

はかつて検察庁の研修で、腹部を刃物で刺されたり、警視庁に出むいたあと、外階段から転げ落ちたり、滝つぼに落ちたり、失笑のタネがつかない。準キャリアだけに、ほかの叩き上げの刑事はあざ笑う。警察庁の上司や同僚でも、面白おかしく酒の話題としているはずだ」

「ひとの失敗をあげつらえば、相手が傷つくのに……」

「警察は上下関係のはつきりした組織だ。先輩や上司があげつらったり、揶揄したり、あざ笑ったりしても、後輩は反論やいい訳などできない。当人は屈辱以外なものでもない。2度あることは3度ある。溝口刑事にすれば、もう結婚式などやりたくない、



というトラウマに陥おちいっている、と考えられる」

結婚式のない婚姻届は美紗社長が認めない。警察ないきも内規で、男女の同棲どうせいを認めない。となると、3度目の結婚式は挙げなければ、和香奈との新婚生活に入れない。溝口刑事はおのずと悩み、苦しむ、重圧の日々となる。自分から婚約破棄をいいだす勇氣すらない。この窮地きゆうちから逃げだしたい、と常に考える。他方で、婚約者に悟さとられないように、死をねがう。

「えっ」

「……願わくは、布施和香奈が交通事故かなにかで、この世から消えてほしい。事故死をねがってみた。それも虚むなしかった」

井伊は足もとまで転がってきた、小学生のサッカーボールを右足で受け止めると、蹴飛ばした。ゴールキーパー役の近くまでとどいた。

「ロジックの飛躍ひやくが過ぎませ

ん？ 仮に、それを認めたとしても、婚約を破棄したい気持ちと、猫事件とはどう結びつくるのですか？」

彼女は横目で、不快感を表していた。

「受賞作品の猫を枯葉に変えてしまえば、あなたは精神的なショックを受ける。彼女の性格から、重大な責任を感じる。また



たく間に落ち込み、生きる術を失い、多摩川で身を投げる。それを狙った犯行だ」

「わたし、そんなにも弱くありません」

「だれだ？ 冷凍機が故障して忙しいさなかに、『大切な絵なんです、放っておけないんです、わたし死にたい』と泣きながら、電話してきたのは……」

「死にたい気持ちと、死ぬこととは別ものです。わたしが多摩川に身投げするなんて、確率はゼロ。お粗末な推理で、不愉快です」

「そうかな？」

「溝口さんが、警備センサーを小細工して、画廊に忍び込み、『水瓶と猫』と『水瓶と落葉』の絵をすり替えたなんて……。世のなかには、巧妙な贋作づくりをする人はたしかにいます。お金をだして頼むと、城山先生の受賞作にそっくりに描いてもらうこともできます。しかし、贋作はどこまでも偽物です。本もののタッチなどと比べ、よく観察すればわかることです」

画廊勤めの彼女は職業から、精査すれば、贋作を見抜ける口ぶりだった。ただ、事件発生したときは気持ちが動転し、受賞作をじっくり吟味していなかったのだという。

「溝口刑事が真夜中に鷹野ビルに入り込み、画廊で筆と絵の具で描き直す。1階には画材店がある。筆も、絵の具もある」

「彼は油絵をやりません」

和香奈が毅然きぜんと言いつつた。

「溝口刑事の線はだめか」

「あつ。わかった。いまのいい加減さんは、明日の挙式が途轍とてつもなく高いハードルになっているでしょ。溝口さんを悪人に仕立て、わたしの心から彼を追いだし、結婚をあきらめさせる、魂胆こんたんだわ。姑息こそくな洗脳せんのう作戦です。そうでしょ。あしたの結婚式が、『春の夜の夢』で、終わらせないでくださいね」

「あなたを洗脳しても、結婚をあきらめるはずがない。二度のドタキャンにも耐えてきたことだし。……溝口刑事の犯人説は、和香奈さんの自殺が前提だ、それがなければ、成立しない。となると、ここは、ふたりの結婚に注力を注ぐか」



井伊は赤いケイタイを取り出し、溝口刑事にコールした。「おれだ。もう名乗らなくても、わかるだろう」

「池袋の裏稼業人だな。和香奈を釈放しろ」
溝口刑事は冷静ぶっているが、その口ぶりから緊張が読みとれた。

「最初の条件だ。あした正午だ、この時間をよく頭にたたき込んでおけ」

「あしたの正午、なにを要求する?」

「銀座のTAKANO画廊で、布施和香奈と挙式をあげろ」

「画廊で挙式? 裏にはなにがある?」

「詮索は無用だ。神主をよんで、挙式をあげ、その日のうちに入籍するんだ。披露宴は3月31日の仏滅だ」

「すると、結婚式場から、300人分の現金を奪い盗るつもりだな」

「300人分の現金だって。だれに聞いた?」

「それは……」

「つい口が滑った、という雰囲気伝わってきた。」

「警察にしゃべった女に伝える。あした多摩川で、和香奈の死体をみたいのか、と。たんなる金目当てなら、鷹野家から1億でも、5億でも盗れると、しゃべった女にそう伝える」

「なにが狙いだ」

「そばにいる布施和香奈はいい女だ。死体よりも花嫁が似合っている。悪い奴にも、人間の心、情け、しゃれっ気はあるものさ。ドタキャン刑事とこの和香奈美人を結婚させてみたくなった。否、3度目のドタキャンを期待した、愉快犯だ、と理解してくれても良い」

井伊が手招きをする
と、和香奈が赤いケイ

タイに耳をあててきた。
彼女の黒髪が顔をなで

た。

「男一人じゃ、式は挙



げられない。その前に、花嫁は解放してくれるんだろうな」

「婚礼の30分まえになっても、新郎がモーニングを着て画廊に来ていなかったり、神主がいなかったり、指輪が用意されていなかったり、それら一つでも欠けていたら、花嫁は渡さない。もうひとつ、捜査目的の偽装結婚だとわかったら、オレが直接手を下さなくても、布施和香奈は死ぬ。それは人生の儂さを知り、絶望感から、みずから多摩川に身を投げるからだ」

「あしたの正午、約束は守る」

「それを守れずして、和香奈が遺体となれば、彼女を自殺に追い込んだ奴はだれだ？ となる。池袋の裏稼業人か。それとも警視庁捜査一課係長の溝口刑事か。それは彼女の遺書から、ジャッジされるだろう。いま、この場で詮議することじゃない」

「挙式となると、当人どうしの打ち合わせが必要だ」

「いいところに目をつけたな。2分間だけ、ふたりに時間をやる」

井伊は赤いケイタイの向きを彼女の口もとにむけた。

「溝口さん……。日比谷公園で、本心でもないこと言っでごめんなさい」

「和香奈を怒らせたのは、ボクが親身に相談に乗らなかったからだ。ぜんぜん気にしてない」

「あしたの挙式だけど、衣装はだいじょうぶですか？」

「和香奈の生命がかかっているんだ。ゼツタイ用意する」

「おねがいね」

「和香奈、助けてやるからな、もう少しの辛抱だ……」

「ちようど2分だ」

井伊が電源を切った。そして、赤いケイタイをポケットに入れた。

「まだ、1分も話していないわ」

和香奈が口を失らせた。

「警戒すべきは、逆探知だ。ここで捕まると、あしたの結婚式すら、おぼつかなくなるんだ」

砧公園を出ると、ふたりは交通量の多い環八の歩道橋をのぼった。彼女は、日比谷公園の婚約

破棄が溝口刑事から撤回され、心が軽くなったのだろうか、

「こつちが、用賀駅のほうよ」

と指す、和香奈の顔が明るくなってきた。

そのさき、高層の用賀駅ビルがみえてきた。

ふたりは駅ビル一階の和食

レストランに入った。水槽に近い席に案内された。井伊は焼き

魚定食だというと、彼女もそれに合わせてきた。

「猫事件の犯人は誰かしら？ 内部犯となると、母親の美紗社長？ 姉の麻耶子？ それに城山先生も入りますよね。姉と結婚すれば、鷹野家の中心に座るひとだから。姉が城山先生をそその



かし、結婚を反対した美紗社長の鼻をへし折ろうと仕組んだのかしら」

「共犯説は採りたくないね。フラワーランドで城山先生に接した印象だと、単独犯でも、共犯でもない」

「それって、おかしくありません？ 溝口さんには強引なロジックを組み立てて、城山先生にはただの勘でしょう」

彼女の目には、公平性を欠く、という批判の光があった。

「実姉の結婚あいてのほうを鼻^{ひいき}にしていて、と言いたい口ぶりだ。人間の勘もすてたものじゃない」

「いい加減ね」

「それを見越して、祖父が井伊佳元と名づけた」

料理が運ばれてきた。

「姉が真犯人かしら？」

「たぶんな」

「わたしは美紗社長だと思う」

「そうかな……。画廊で、最初に猫と

落葉が変わっているのを見つけたのは美紗社長のほうだった。あら、この受賞の猫はどうしたのから？ といった。おれが絵のなが狭くて、猫が逃げたのかな？ といったくらいだ。あれは演技だったのか」

井伊は横目で、カラフルな熱帯魚が泳ぐ水槽を見ながらいった。



「きつと演技です。そのくらいのことにはします」

「美紗社長を犯人とする、動機や根拠は？」

「昨年の城山比呂志展で、美紗社長は若い画家の芽を伸ばす、というポーズをとりつづけていました。でも、城山先生が次年度のコンクールで予選落ち。美紗社長の本音は、城山先生の個展をやりにたくないんです。熱意は完全に冷め切っています」

「なるほど」

「姉は1カ月ほどまえ、美紗社長に面とむかって罵ったことがあるんです。母は作品をみる目がゼロ、節穴なのに、コンクールの審査員面をしている、と。ふたりの間は過去に増して、深い軋轢^{あつれき}が生じています」

「猫事件が鷹野家の結婚問題と結びついてきたな」

「美紗社長は、贖物作りの画家のルートを知っています。真夜中でも画廊に難なく入れます。鍵もあり、警備システムも知り尽くしています。独りで、かんたんに作品を取り替えられます」

「なるほど」

「美紗社長はあした個展準備で全員が集まれば、その場で、会場に賞作がない城山比呂志展なんて意味がないわね、中止しましょう。そんなふうには、きつと言い出します。内心は、節穴だといった姉や、次年度落選の城山先生に恥をかかせる、という魂胆^{こんたん}です」

「個展のキャンセルは、画廊の信用度が落ちないのかな？」

井伊は焼魚の骨を外しながら、上目で和香奈を見た。

「銀座の大画廊から、有名な絵画とか、芸術品とかが贋作にすり替えられるという、盗難事件はめずらしくありません。それによる、作品展の取り止めもありますから」

「おぞましい対立だな。戦国時代のように、親の寝首を搔く、子どもに毒を盛る、それを思わせる。ところで、父親はこの事件と、無関係なのかな？ 一度も話こは出てこないけど」

「父には絵心はありません。庭弄りが趣味で、青い火鉢に、盆栽を植えて楽しむひとです。不動産ビジネスにも関心がありません。登記上の社長だけです」

「美紗社長は不満？」

「もう、とつくに父をあきらめています。残された期待は姉だけです。ですから、ビジネス人じゃない城山先生との結婚には、大反対なんです。鷹野家が終焉するからといって」

「時価40万円の猫事件の背後に、数十億円、数百億円の資産相続が秘められているのか。さあ、移動するか」

用賀駅ビルで、ふたりはそれぞれ雨傘を買い求めてから、田園都市線の電車に乗った。銀座駅のひとつ手前の、日比谷駅で下車し、近くのティールームに入った。井伊は夜7時にTAKANO画廊に侵入すると、決めてい



た。

「犯人が特定できる、物証をつかんでくる。『水瓶と落葉』の絵自体が、物的証拠になる可能性が高い」

「問題は贋物の作者ですね。その推理はわたしが受け持ちます。仕事から、いい加減さんよりも、目が肥えていますから」

「それはやばい話だ。鷹野ビルのまわりには刑事が張り込んでい

る。ふたりして仲良く現れたら、その場で、あなたは保護され、おれは逮捕だ。あしたの挙式どころじゃなくなる」

「……。画廊はきょう休館です。鍵をお預けしましょうか」

「それも危険だ。刑事が網を張った、画廊に忍び込むんだ。ひとつ間違えば、おれは住居侵入の現行犯で逮捕される。布施和香奈から画廊の鍵を強奪し、絵画を盗りに入ったといい、営利誘拐罪の決定的な物証になる」

「怖い話になってきたわね。からだが震える」

コーヒーカップを持つ彼女の手が止まった。

「さあ、時間だ。おれのケイタイを持っていな。何かあれば、連絡がつけられる」

外に出ると、小雨が降っていた。井伊は西銀座デパートで、顔隠しに利用できそうな、やや大き目の傘を購入した。

かれは有楽町マリオン、数寄屋橋、銀座4丁目の交差点から、用心深く鷹野ビルへと近づいた。傘を広げたかれは、ビル周辺の同一区画を行き来してみた。

(刑事たちはどこに張り込むのか)

駐停車の乗用車に複数の人影があれば、それが捜査陣ではないか、と疑ってみた。

井伊は赤いケイタイで、会議中の鬼頭統括部長を呼びだした。

「いま銀座です。雨が降りはじめました、迷子の猫はどこに雨宿りするんですかね。猫は傘を持っていないし、雨合羽も着れないし」

かれはさも通行人がふいに立ち止まり、ケイタイ電話をかけている、という演出を作った。その目は警察の捜査網をさぐっていた。他方で、1階のガラス張りの画材店をうかがっていた。

夜7時7分前。店内にはまだ3人の人影があった。

「ニュージラード猫はビルのなかにいる。猫は濡れるのを嫌がるからな」

「人間も、濡れるのは嫌いますけどね」

鬼頭とのやり取りは上の空だった。

「布施さまはどうしている？」

「ティールームで、結果を待っています。こっちはひとり雨のなかを動きまわっています」

「わが社はお客さま第一主義だ。それでいいんだ。世田谷の

布施さまが、銀座の喫茶店で夜まで待っている。それは井伊店長に期待しているからだ」



「はやく決着をつけて、引き揚げたい。こんな神経を使う現場からは」

井伊はビル周辺で徐行する車にも、ショーウィンドーに写る人影にも、神経を使っていた。

「あきらめるな。最後まで探せ」

「部長のところの猫は、となりの美術教室が好きなようですね。よくトイレを借りに行くとか」

「世田谷まで行って、そんなことを聞いてきたのか」

「銀座の画廊から、どうも猫は消されたようです」

「殺された？ だれに」

「さあ。きつと画廊のビルに犯人がいる」

「殺す動機は？」

「軋轢あづれきですかね。外国から良い

猫がきた。それを嫉ねたんで、別の

飼い主が殺した？」

「猫好きはそんなことをしない」

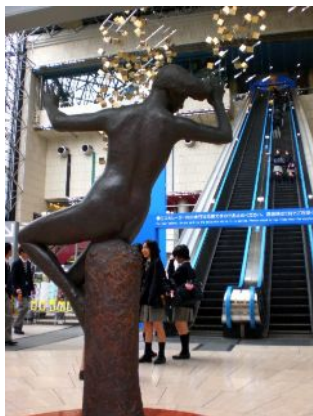
「い」

画材店の出入口には『クロールズ』の札が下げられた。女性従業員

ふたりがそのまま退店たいてんして

いく。レジの側では、鷹野麻耶子たかのまやこがひとり電話をかけていた。

「もし、殺されていたら、布施さまには最大限の弔意ちよういを述べてから、今後とも、池袋芸術劇場からのお帰りの際にはぜひ、セー



フティー池袋店をご利用してください、と忘れずにつけ加えるんだぞ」

「彼女はもう高額のメロンを買わないそうです。500円か、600円の特売品で節約すると言っていました」

「それなら、ほどほどに銀座から引き揚げろ。いつまでも付き合う必要はない」

「わかりました」

TAKANOビルの正面玄関先で、井伊は傘をたたんだ。館内の一階通路には、刑事らしい、ふたりの男の視線があった。井伊は通路側から、画材店の玄関ガラスを開けた。

「もう閉店しています」

麻耶子が手でデザイン電話の受話器を押さえた。

「油絵で使う、ナイフがほしい」

「レジは閉まっていますから」

「あしたの日付で処理しても、税務上、厄介なはなしじゃない」

井伊が強引にショーケースのほうに歩み寄った。

「今朝、この廊下で、『きぬた美術教室』のポスターを見ていらした方でしょ」

麻耶子の目が警戒の光をおびた。

「それ以前に岡本一丁目で、あんたが運転するベンツにクラクションを鳴らされたことがある。まあ、憶えていないだろうな。あんたは皮製の『カスケット』帽子を被っていた。おれは、超高級メロンを抱え、布施和香奈さんの住まいを探していた」

「和香奈……」

「じゃあ、またね、と彼女は通話中の電話を切った。

「髭を剃るとか、顔を削ぐとか、そういう高精度のナイフでなくてもいい。油絵を削るだけだ」

「和香奈とはどういう関係ですか」

「油絵のペインティング・ナイフを買いにきた。怪事件を解き明かすためには、どうしても必要なんだ」

「怪事件？ よくわかりませんが、買ったなら、すぐ帰ってください」

彼女はショーケースからナイフを取り出すと、こちらには選択させず、そのまま袋に入れた。

「おれ帰った後に、110番するつもりだな」

彼女はそれについて答えなかった。井伊は千円紙幣を出した。

「いま、お釣りを出しませうから……」

彼女はレジの鍵を取り

出していた。

「つり銭はいらない。2

階の画廊にいこう」

「きょうは休館です」

「あなたは鍵を持っていて、画廊を開けてほしい」

「ナイフで脅して、展示品を奪う気ですか。警察を呼びますよ」



「呼ぶなら、城山比呂志先生を呼んだ方がいい。絵画の真贋の立会いで」

「なにが目的ですか？」

「あなたはおとこの夜20時から、翌11日の10時30分の間に、画廊に入り込み、『水瓶と猫』の絵から、猫を消し去った。妹の和香奈さんは、その事情がわからず、管理責任を感じて多摩川に身を投げる、寸前だった」

「へんな言いがかりをつけないでください。あなたは何者ですか。和香奈と、どういう関係ですか」

「池袋の裏稼業人、ともいわれている」

「えっ。和香奈を返してください。誘拐しているんです。警察が必死になって捜しています」

彼女の顔が深刻な表情になった。

「心配しなくても、妹は自由の身だ。拘束や拘禁など、一切されてない。さきにそれを証明しよう」

井伊は赤いケイタイから、和香奈が持つ自分のケイタイを呼び出した。一言、二言話してから、その受話器を麻耶子に手渡した。

「この裏稼業人って、何者よ」

麻耶子がいきなり和香奈に噛みついた。

「応えなさい。……。和香奈が誘拐されたといっって、いま大騒ぎしているのよ。あなたはなにを考えているの」

和香奈が釈明しているようだ。

「バカな妹ね、あなたが裏稼業人に頼んで、誘拐事件を引き起こ

したの。あなたって妹は。結婚式は二度も棒にふるし。自分のやっていることが、どんなに他人に迷惑をかけているのか、わかってないの」

「鷹野麻耶子さん。妹を責めるのはもう止めたほうがいい。事の原因は、猫の改ざん事件にあるんだ」

井伊が赤いケイタイを取上げた。

「妹のいる場所を教えてください」

「2階の画廊が先だ」

「わたしを画廊に閉じ込めるつもりなの」

「それだったら、ペインティング・ナイフじゃ迫力が出ない。金物屋かスーパーで、鋭利な刺身包丁を買ってくるさ。猫の改ざん事件が解明したら、妹がいるテイルームをおしえる」

「わかったわ」

麻耶子といっしょに廊下に出た。刑事らしい人物の脇を抜けていく。二階の通路は無人だった。彼女が画廊の鍵を取りだし、施錠を解除した。ドアを開けた。明かりのスイッチに、麻耶子の手が伸びる。井伊はとっさにその手を止めた。

「灯りが合図になり、警察が踏み込んでくる」

廊下の明かりが射しこみ、画廊の内部には多少の明るさがあつ



た。

井伊は柱に設置された、非常用の懐中電灯を手にした。ライトの円い光芒が、城山比呂志展の看板と、飾られた花瓶の花を照らした。光は外部に漏れないように、画廊の奥へと進む。やがて『水瓶と落葉』を浮かび上がらせた。

「さあ。3枚の落葉を削ってもらおう。一両日中に描かれたものだ。絵の具は柔らかいはずだ。その点では、水彩画とちがう」

「これは城山君の作品だから、そんな真似はできません」

「ちがうな。受賞作『水瓶と猫』は、あなたの作品だ」

「城山君の作品よ。わたしのじゃない」

それを貫き通す態度だった。

「水瓶は、鷹野家の庭に置かれている火鉢だ、父親の三郎さんがガーデンングの装飾品として使っている。その水瓶だ」

「城山君がわが家の庭で描いたのよ」

「往生際が悪いな。ウソを重ねたら、化けの皮がはがれやすくなる。城山先生は鷹野家に一度も出入りしてない」

廊下から、警備員のライトの光芒がふいに射し込んできた。井伊は麻耶子の身体を強引に伏せさせた。円い光が画廊から消えていく。

ふたりは立ち上がった。

「この絵は城山君との合作なの。水瓶はわたし。猫はかれがニュージールランド旅行で描いてきたのよ。応募作品だから、城山君の名前で出したの。審査委員に母がいたし。受賞しても、後でいろ

いろ言われるから」

「それも、ちがうな。猫もあなたの筆だ」

「どんな猫か、観たことがあるの？」

麻耶子は開き直りの態度になった。

「これから観させてもらう。はやく落葉を削りな。炙りだしのよう、出てくるはずだ。モデルの猫の飼主はスーパールの部長だ」

「城山くんが自分で描いたから、どこの猫か、それを知っているのよ。わたしは知らない」

「また、ウソか。いい加減にしな。きぬた美術教室にいつも現れる猫だ。あなたはそこの経営者兼、水彩科コースの講師だ。描かれた猫を知らないはずはない。鬼頭というスーパールの部長が飼う猫だ」

「城山君がそう話したのね。でも、かれは猫を得意とする画家よ。」

城山君が描いた猫よ」

「おれは猫の持主、鬼頭なる人物を知るものだ。フラワーランドで絵を描いていた城山先生の前で、好かない猫だというと、『とても愛らしい猫で、いいタッチですよ』と先生は誉めた。画家は自分の作品に、いいタッチですよ、という誉め方はしない。よほどの自惚れでも、鷹野麻耶子さんの描いた猫だから、とてもいいタッチですよ、といえたのだ」

「まったく、城山君は警戒心がないんだから……」
彼女の声に苛立ちがあった。



「けさ、札幌からきた男だと偽って、おれはこの画廊で、美紗社長に特別に観させてもらった。青い水瓶に浮かぶ落葉と比べ、三枚の落葉が室内灯の明かりでことのほか反射し、光っていた。絵は素人のおれだが、光る落葉を見て、最近になって手を加えたのかな、と思った」

そういいながら、井伊が懐中電灯の光芒を落葉にあてた。その油がきらきら繊細に光る。そして、かれはこういった。

「おれは美紗社長に、城山先生が受賞作を描き直したのか？ と訊いてみた。即座に否定された。しかし、おれの頭のどこかに、それが残っていたし、諸々のことが結びついてきたのさ」

「ぜんぶ推測でしょ」

彼女が光る落葉から目はずした。

「犯行の手口だが、事件の夜、あなたは1階の画材店から、油絵の道具をこの画廊に持ち込んだ。そして、猫のうえに、3枚の落葉を描いた」

彼女は無言だった。

「じつは、鷹野家の一員になる、溝口刑事をまず疑ってみた。かれが犯人だったら、1階に画材店があるから、絵の具や筆の調達に苦労しない。だが、動機にムリがあった。一方で、画材店の経営者のあなたならば、難なくできる。夜間ひとり、あなたは画材店と画廊の機械警備のセットや解除くらいはできる。ビル全体の管理や警備システムに疎いにしても……」

「母だって、同じじゃない」

「美紗社長は画廊の経営者だが、画家じゃない。これだけの絵は描けない。そうだろう」

「良い勘よ。三つの落ち葉は削るから」

麻耶子がナイフを手にした。井伊はその手をつかんだ。

「真実がわかれば、削らなくても否い。犯人は姉だった、猫は落葉のしたに隠れている。となると、妹の和香奈さんには管理責任がない。それが証明できただけでいいのさ。『水瓶と落葉』はそれなりに味のある作品だ、残したほうがいい」

「いいわよ。削るわよ」

「作品はそのまま残して、動機を教えてほしい」

「母の目が節穴だ、と証明するためよ」

「和香奈さんも、似たような考えだ」

「そうでしょう。あしたの午後3

時には、ここに城山比呂志展の関

係者が集まってくるわ。この受賞作はわたしが描きました。母は、わが娘の絵のタッチすら判ってない、お粗末な画商です。ふだん絵を観る努力もせず、鷹野家の財産をバックに審査員の地位を裏で買ったんです。実娘の絵のタッチすら見破られない、恥ずかしい審査員です。と暴露してから、わたしは自分の作品だから、削るつもりでした。いまでも、おなじことね」



麻耶子がふいにナイフで落葉を削りはじめた。もう、手遅れだった。井伊は傍観に徹した。

色彩の違う絵の具で汚れた、猫がだんだん浮かび上がってきた。「和香奈から、今晚にでも、関係者の方々に城山比呂志展の中止を連絡させるわ」

「猫の改さんが母親の虚栄を暴くためだったにしろ、事前に妹には耳打ちすべきだった。責任を感じた妹が、多摩川に身を投げていたらどうする。妹は結婚式が二度も頓挫し、精神的な逆境の重圧の下にいるんだ。ちよつとした弾みで、死に至る。まさに危機一髪だった。恩を着せるわけじゃないが、駆け込み寺として、池袋の裏稼業人の存在がなければ、今晚が通夜だ。あしたは婚礼でなく、告別式だった」

「……。和香奈への罪滅ぼしで、気の弱い妹に代わって、わたしが溝口さんに狂言だったと、誘拐事件の一部始終を説明します。顛末をくわしく教えて」

一通り説明した井伊は、和香奈の赤いケイタイを麻耶子にさしむけた。それで、溝口刑事に電話をかけた。和香奈でなく、姉の麻耶子だったので、溝口刑事は驚いているようだ。それが麻



耶子の表情から読みとれた。

「実はね。誘拐事件は和香奈が仕掛けた狂言だったの。和香奈は無事よ。……。理由はあなたのドタキャン。とくに二度目のドタキャンの、本当の理由が知りたかったんですって。捜査上の秘密だなんて、あなたが格好つけたから、誘拐ごっこになったのよ。諸悪の原因はそっちにあるわよ。これから溝口さんに会って、くわしく説明するから」

麻耶子は強気の態度だった。こちらの顔を見てから、

「……。池袋の裏稼業人のこと？ 和香奈が声優でも頼んだんじやない。くわしくは妹から説明させるから。少し、気を沈めさせて、出頭させるわ。この際、姉として、溝口さんに聞いておきたいんだけど、あしたの画廊の挙式はどうするの？ 個展はお流れだし、自由に挙式に使えるわよ。……。えっ、挙式が明日だと、性急すぎるって？ 妹はあしたの挙式を頭から信じているわよ。捜査上の詭弁だった。それなら、そうと行ってちようだい」

麻耶子の語調が強くなった。

「明日もドタキャンなのね。あの子、本とうに多摩川に身投げしてしまうわ。……。挙式はいまから声をかけて、参列できる人だけでいいじゃない。母親の美紗なんて、いなくてもいいのよ。神主と当人どうしだけでも。うちの父はまちがいなく参列するし、立会人になれるわ。挙式は成立よ。あとは、あなたたちふたりで、区役所に婚姻届をだす。住まいは世田谷・岡本一丁目のマンション。流れるように、ことが運ぶじゃない。……。そうよ。披露宴

まではあと20日あるんだから、新婚生活のなかで、ふたりでゆっくり考えたなら」

溝口が誘拐捜査の話聞かせはじめたようだ。

「わかったわ、警察としては調書が一通り必要なのね。数寄屋橋交番ね、これからそっちにいくから」

麻耶子が勝利のウイंकをして電話を切った。

「おどろいた。押しが強さはすごい。妹とは大違いだ」

「誘拐事件の発端は猫事件だから、わたしが火種。先に溝口さんに会って、しっかり説明しておきます。あの妹は気が弱いから、わたしが警察で説明がついたころ、数寄屋橋交番まで来るように、伝えて」

「1時間くらい後でいいかな」

「2時間は見ておいて。」

池袋の裏稼業人さんは消えてもだいじょうぶ。捜査一課がいつまでも追

回すほどの事件じゃないし」

「頼りがいのある、姉だ」

井伊は傘をさしてTAKANOビルから出た。刑事が飛び出してくる気配はなかった。警察無線から捜査終結の指示が出て、刑事たちはもはや他の事件に飛んでいるのかもしれない。



井伊は日比谷のティールームで、和香奈と向かい合った。そして、受賞作の実態と猫の改ざん事件の一部始終をおしえた。

「……実はいい加減さんには、言いにくいんですけど」

「なんだ？」

「最初に、お願いしたとおり、わたし溝口さんとの婚約を破棄したいんです」

「えっ。なんで？ また」

井伊はコーヒを噴出しそうな、頓狂な声とんきょうをあげた。

「さっき砧公園で、いい加減さんが何気ないしぐさで、すれ違うベビーカーの赤子に手をふりましたよね。ティールームで待つ間、夫と赤子との、将来の家庭像を考えてみたのです。……、わたし溝口さんとの結婚に自信がなくなったのです」

彼女の視線が下向きになった。

「困ったお嬢さんだ。収入面や出世など含めた、溝口刑事の将来性に疑問を持ったからか？ 刑事として、たしかに失態や失敗はひどいものがある。しかし、それは経験不足と気負いからだ。彼は準キャリアに胡坐をかかず、拳銃や毒ガスの犯人が立てこもるような、危険な現場の最先端に出ている。前向きで、仕事熱心だ」

かれはあえて高い評価を与えた。

「その仕事熱心が問題なんです。溝口さんとの結婚後を考えるほど、不安で、自信がなくなるんです。凶悪事件が起きたら、かれは何日も家に帰らず、捜査に専念するひとです。わたしが子ども

を産むとき、産院で励ましてくれたり、手を握ってくれたりすることよりも、捜査を優先します」

「わがままなお嬢さんだ。手を握りたかつたら、今のうちに、ふたりでしっかりと握り合っていたらいい。日本人は結婚すれば、夫婦で手など握りたがらないから。そういう民族だ」

「宮参りだつて、きつと父親のいない写真になります。七五三だつて、母子家庭とおなじ。わが子が成長しても、父親が仕事熱心で、子どもといっしょ

に遊んでやれない、親子で交わした遊びに行くという約束も守れない、そんな家庭になります。子どもはまわりの親と比べ、淋しい想いをします」

彼女は深刻な口調で語った。



「それは考え過ぎだ。子どもはそれなりに育つものさ」

「溝口さんは仕事を理由にして、なにかにつけて約束を破る。このまま結婚すれば、温かい家庭が作れず、不幸な家庭になるだけです」

「警察官の妻になると、決めた時点で、心構えをしつかり作るべきだった。いまさら、言うべきことじゃない。そんなことをいっ

たら、外国航路の船員は一生涯、だれとも結婚できない。主婦のわたしが家を守る、あなたはしっかりと働いてね、家族のため、社会のために、という精神が大切だ。これは溝口刑事の問題でなく、和香奈さん自身の問題だ」

井伊は叱責の口調になった。

「でも」

「デモじゃない。あなたの考えは甘い」

「甘いでしょうか」

「そうだよ。宮参り、七五三、入園入学、妻が一人でこなすべきだ。そのうえで、深夜に帰宅してきた夫に晩酌の相手をしながら、妻として母親として、きょうの子どもの一日を報告する。話して聞かせることに、喜びと楽しみを見出す。夫は子どもの寝顔を見、妻の話を聞きながら、感動をおぼえる。これが夫婦の味さ」

「わかりました。がんばってみます」

和香奈の顔には明るさもどってきた。

「いいかい。二度にわたる結婚式のドタキャン劇があった。あなたは死にたくなるほど、辛い思いをした。しかし、まわりの批判や白い目に耐えてきたんだ。これひとつを取ってみても、刑事の妻としての素養は十二分にある。あしたから夫婦だ。夫の晩酌のあいてができるていどに、アルコールは嗜むほうがい」

「自信が出てきました」

「善い夫婦になるさ。さあ。誘拐事件の後始末で、数寄屋橋交番に出頭だ。麻耶子さん一人じゃ、弁明に苦勞しているはずだ」

井伊は自分も立ち会うことで、腹を決めていた。

「いい加減さんは交番によらず、まっすぐ帰ってください。わたしは自分で後始末をつけます。これ以上のご迷惑はおかけできません」

「ほう、強い意志と勇氣あるんだ」

「警察には口が裂けても、裏稼業人がセーフティー池袋店の店長だとはいいませんから。もちろん、あしたからの夫にも。わたしと姉の秘密にします」

「じゃあ、そうさせてもらうか。裏稼業人は表にでない方がいい。姉妹がふたりして、溝口刑事に事情を話せば、理解が得られるだろう。もしも駄目だったら、連絡して欲しい」

「だいじょうぶです。もうひとつ、おねがいがあるんです」

「また、別の依頼？」

「3月31日の披露宴には、いい加減さんも出席してくださいね」

「仏滅は苦手だ」

「信仰心や縁起かつぎなど、持たない主義でしょ」

「今晚で、お別れだ」

「数寄屋橋交番の近くまで、いい加減さんの傘に入れてくださいますか？」

「いいね。銀座で相合傘か。ご褒美かな」



井伊はティールームの店頭で傘を広げた。和香奈がこちらの腕に手を添えてきた。数寄屋橋にむかいはじめた。

「雨って、情緒あるのね」

歩道の水溜りが、斜雨に濡れた街灯の明かりを映しだす。ひとつ手前の信号で、ふたりは立ち止まった。

「この傘を持っていきな。婚礼の祝儀代わりだ」

井伊がそれを和香奈にさし向けた。

「いい加減さんに感謝します。ほんとうにありがとう」

「幸せにな」

井伊が背を向けて、雨の雑踏のなかに消えた。

【了】

写真モデル・奈良美和さん（コーチ/コミュニケーションアドバイザー）

絵画協力・高田雄太さん（画家）

写真提供（猫）・中嶋賢子さん（会社員）

取材協力・森田画廊（銀座二丁目）、PIGA（青山）

写真協力（子ども）・武内志央凜ちゃん（新潟）、嶋貫瑠柱くん

（横浜）、張笑涵ちゃん（中国）、

【協力者および提供者は、本文とまったく関係ありません】